日本
ハンザキ研 究所ニュース 2010(8)：通巻 No.56

発行２０１０年８月３１日
〒６７９－３３４１兵庫県朝来市生野町黒川２９２
Tel／Fax:０７９－６７９－２９３９
E-mail：info@hanzaki.net
URL：http://www.hanzaki.net
NPO 法人　日本ハンザキ研究所　栃本 武良

ハンザキ研をめぐるスター⑱

ブラックバス（オオクチバス）

スターとして登場させるのには少々ながら抵抗があります。それでもハンザキを巡る河川環境の中で、今や大きな存在となっている魚です。私が初めてこの魚に出会ったのは 50 年ほど前の学生時代に、静岡にあった大学のウナギなどの実習場でのことでした。多数の池がある中で、教官からこの池には 26 匹のオオクチバスがいるのだと言う説明を受けました。その当時は、単に「そうなのだ」としか考えることが出来ませんでしたが、これは重要な事だったのです。毎年の計数で脱出のないことを確認するのです。

昭和 45 年に、生野町の銀山湖でブラックバスが大発生して新聞紙上を騒がせました。漁業組合がワカサギの導入を図って試験操業をしたところバスばかりしか採れなかったというものです。

食う餌がなく腹がへこんだブラックバス

ある夜の調査で、水面にフワッと浮いているバスを掬い上げました。驚いたことにその腹部は“へ”の字に凹んでいたのです。食うだけの雑魚を食いつくし、仲間の小型魚も食い尽くして、とうとう食うものがなくなってしまった状況なのです。肉食魚はナマズやウナギなどいるのですが、バスのように遊泳力があって捕食能力の強い魚は日本にはいません。先日、新聞に全長 735 ㍉、体重 10.12 ㌔の大物バスの記録が報道されていました。こんな大きな魚が席巻する日本の狭小な水界では雑魚はひとたまりもありません。大いに食べてバスを退治しましょう。白身で旨い魚です。

写真 1　岡山のはんざき祭りでの賑わい

写真 2　コウノトリシンポジウムでの増井さん

写真 3　カニ籠セット時の黒川ダム湖

写真 4　翌朝の同じ場所

写真 5　円山川ひのそ島のカヤネズミの巣

写真 6　立ち往生していたハンザキ

写真 7　第２回ハンザキの夜間観察会

写真 8　不気味なハンザキの伝染病？

写真 9　大阪府立大生の若い力で水制が完成

写真 10　ポンプピットへの砂泥流入防止を

写真 11　スノコの下にキイロスズメバチが巣を

写真 12　アフリカ料理で人気のワニ肉

コウノトリと共に

コウノトリの郷公園長　増井　光子さんのこと

4 月の池田　啓コウノトリの郷公園研究部長さんの死去に続いて、７月には園長の増井光子さんの訃報が大きく報道された。７月の英国における馬術競技大会において落馬されたとのことである。増井さんは女性として初めての東京の多摩動物公園長や上野動物園長、日本動物園水族館協会長を務めたことや、パンダの初の人工授精成功で知られた根っからの動物園人であった。全国の動物園や水族館の園館長が年に一回集まる会合では、紅二点（江ノ島水族館長の堀さんと共に）なのに、いつも見落とされて「紅一点」と来賓の発言があったように、派手な服装や化粧も無く現場一筋の雰囲気を持ち合わせていた。

私との接点は、やはりハンザキのことである。上野動物園の園長を退任した後、母校の麻布大学で教授を勤めた時に数人のハンザキ志望の学生を育てたのであった。大学の先生がハンザキに関心を持ってくれると、若い人たちがハンザキ研究に挑戦してくれることになり大いに期待したのだが、数年で母校を去り、横浜市のズーラシア園長に転出された。
やはり動物園の現場に惹かれていたのであろう。大学時代に指導した柿木俊輔さん（兵庫県自然保護協会）や船戸美々さん他（高知県立のいち動物公園）など期待の若手が育ったが、あまりにも短い期間だったのは残念であった。ライフサイクルの長いハンザキの研究は次世代を担ってくれる若い人材が不可欠なのだと思う。

最後にお会いしたのは、平成 20 年に豊岡市で開催された「コウノトリシンポジウム」の時である。岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館長）、鷲谷いづみ（東大教授）、柳生博（コウノトリ・ファンクラブ会長）、今森光彦（里山の写真家）そして池田啓さんという豪華パネラーの中になぜかハンザキ代表の私が加わってのシンポジウムであった。（当ニュース№29 参照）４年前の動物園水族館協会の総会でお会いしてからで、久し振りのことでした。「相変わらずハンザキを追いかけています」というと「いいですね！」と答えてくれた。

70 歳を超えてイギリスでの馬術大会に参加されていたという報道で、「良き生き様だ」と私はそう思った。最後まで自分の好きなことをやりながらと言う点で大いに共感を覚えるのである。無論、まだまだいくらでもやりたいことはあるだろうが、それは誰しものことであり、多くの場合かなわぬ願望でもあるだろう。私も夜の川で一人ハンザキの調査をやりながらいつもそのように考えてきた。最後の最後まで好きなことができると言うのは幸せな事だ。先日、東京の“野生動物救護獣医師協会”のニュースレターに、生前から「馬術の最中に死ねれば本望だ！」とおしゃっていたと書かれていたのを読んで「やはり！」と思った。

８月 30 日には「感謝の集い」が開催されると言うご案内が増井梅宗國様から届きました。感謝の辞というタイトルで「光子を囲み、ご談笑いただけますれば大変幸せに存じます」と述べられていました。増井家の雰囲気が十分に伝わってくる文章ではないでしょうか？
私も増井光子さんの生き方を実現できればと考えています。

円山川水系におけるオオサンショウウオ事情　①

会員　加賀見　省一（豊岡市但馬国府･国分寺館長）

大きなタイトルですが、私の生活拠点になっている円山川水系下流域のオオサンショウウオを取り巻く事情について書いてみたいと思います。下流域と言っても厳密な意味ではなく大雑把に豊岡市内のことになります。2005 年４月に平成の大合併で出石町･但東町･日高町･竹野町･城崎町を加えて新豊岡市が誕生しました。総面積 700 平方キロほどになり、神戸市を抜いて兵庫県下最大の面積を有する市域になりました。

さて、この広大な面積の豊岡市内で大切な仕事があります。それは市民の方々からのオオサンショウウオの保護要請が時々あり、救出することです。平均すると年に 5～６件程度ですが、危険な状態のことも多く内輪だけの話にせずハンザキ研にも知らせておいたほうが、今後のオオサンショウウオの保護に繋がるのではないかと思いハンザキ研ニュースに書かせていただくことにしました。

この写真６は今年の６月23日に市内日高町栗山で発見されたものです。見つかったのは、集落近くにある田んぼの用水路で、幅は 30 ㌢程度、水量はちょうど体が水面下にあるという状態でした。オオサンショウウオは上流を向いており、その前には高さが 20 ㌢ほどの U 字溝があり動けなくなっておりました。発見者は地元の方で豊岡市役所日高支所へ電話し、それが私の職場に回されてきたと言うことです。私は出張中であったために本庁の応援も得て３名で現場に向かいましたが、全長 110 ㌢を超える大型個体で体つきもなかなか立派で始めて対応した職員はかなり苦戦をしたそうです。まず、持参した網に入らなかったために体重が測定できず（10 ㌔までのはかりしか持たなかったので無理ではあったでしょうが）、全長も小さな測定器しかもって行かなかったので全長がわかる写真も撮れていないなど、課題を残す事例になりました。地元の方々の協力があって近くの円山川支流阿瀬川に放流したとのことです。

翌日に確認に行きました。仮に段差のある水路を乗り越えたにしても、その先は更に細い流れになっており、安定した場所に行くことは不可能で、人家の側で発見されたことが幸いだったと思います。この用水路は阿瀬川と観音寺川に繋がっていることから、どちらかの川から迷い込み 200 ㍍から 300 ㍍移動してきたことになります。また、一旦用水路に侵入すると U ターンすることもできず前に進むしかない構造になっています。人間にとってはなんでもない用水路（大切な水路ではありますが）、でもオオサンショウウオにとっては大きな落とし穴になっています。今後の対応策としては 20 ㌔までのはかりと大型の網を用意し幅 30 ㌢、長さ 127 ㌢まで測れる計測器を作成しました。

（栃本は、バネばかり 10 ㌔、5 ㌔、2 ㌔、1 ㌔４種で調査をしているので、組み合わせで 18 ㌔まで測定できます。全長測定器も 80 ㌢までのものを使っており、40 ㌢目盛り板を持っています。幅は 15 ㌢ですが、納まらない大型個体は測定器を横向きにすれば測れます）

アフリカ料理を食べて夜のハンザキを見よう！！

夏休みもあと僅か数日となった 28 日、約 50 名の人々がアフリカ料理に挑戦した。変なタイトルのイベントだと思われた方が多かったようだが、それなりの反響があったことが分かる人数だろう。熱帯のアフリカと冷たい水中に生息しているハンザキの取り合わせがユニークだったのだと思っている。

そもそもは、オートバイで２回もやって来たシェフとの出会いから始まったのである。姫路市内でアフリカ料理店をやっていると言う話を聞いて、ゾウやライオンの肉が出るのかと冷やかしたが、昨年の暮れに店を訪ねた。色々説明を聞かされたが、頭の中に残ったのはダチョウのレア肉とクスクスであったが、とにかく旨かった。生野まで出張できるかと持ちかけると二つ返事でこの企画が進められることになった。

30 人くらいと言うシェフの言葉であったが 50 人でもまあ何とかなるでしょうとのことで、当方のスタッフも手伝い、地元産の野菜類も提供していただいての料理となった。肉はワニ・ホロホロチョウ･ラム･ポーク･チキンの５種だったがワニが真っ先に消えてしまった。白身で癖のない軟らかな肉質であった。大きな缶詰のトマトで作ったスープは絶品で多くの人がお代わりしていた。腹いっぱいになって、暗くなった川辺で４個体のハンザキを観察できた参加者は大満足であったようだ。奥見シェフも張り切って来年の約束をしてくれた。

ダム湖に閉じ込められたハンザキを救出しよう！

ハンザキ研は市川のほとりにあるが、下流は兵庫県の多目的ダムである銀山湖、上流は関西電力の黒川ダムに挟まれている。昭和 40 年代末に建設されたこれらのダムは、現在のような十分な調査がなされぬままに、黒川ダムにはハンザキが閉じ込められていると言う。（当ニュースレター№50 参照）

私はこの話を聞いて、当時としてはいた仕方のない事情だが、何とかしてやりたいと考えた。そこで、関西電力奥多々良木発電所に“黒川ダム湖からのハンザキ救出作戦”を提案した。環境にやさしい関西電力であり、さっそくダム湖への立ち入りを許可していただくと共に、来年度の本格調査に全面的に協力していただけることになった。今回は、その小手試しとして手持ちのカニ籠１０を使っての試験的な調査を実施してみた。黒川ダム湖には４つの谷筋があり、陸からのアプローチが可能な２つの谷にそれぞれ５つの籠をセットした。しかし、翌日に籠を引き上げるために現場に行くと、水深が 10 ㍍ほど上昇しており、周辺の景観は全く変わってしまい、籠のロープも水没しており引き上げることができなくなっていた。この人工湖は揚水式発電所の上部ダムであるために、夜間に下部ダムから水を汲み上げておくのでこのようなことになり、厳しい環境を実感させられた。結果として籠に入ったのはブラックバス１尾であった。来年、再度挑戦したいと思っている。

ハンザキ研日誌　　２０１０年８月

１日　生野町栃原川祭りへ参加
２日　・NPO 法人事務局会議、新に増子夫妻が事務局員に
　　・兵庫県姫路利水事務所来所
３日　・養父市教育委員会ハンザキの腐乱死体搬入、マイクロチップ確認
　　・兵庫県生物学会副会長の前田常雄先生植生調査に来所
４日　ショーケース３台受贈
５日　・エコひょうご取材
　　・保護中のハンザキ３個体の表皮に“傷？”確認（写真８）
６日　・ジャスコ加西北条店の一行８名見学に
　　・香住高校 10 名見学に
７日　ショーケース２台受贈
８日　岡山県湯原町の“はんざき祭り”出展（写真 1）
９日　県立加古川東高校生物部来所
１０日　北里大学北浦教授他来所
１１日　・広島市安佐動物公園の田口飼育員と大阪府立大学生など 14 名来所（写真 9）
　　・株式会社キッズラボの須磨水族園イベント一行 49 名見学に
　　・ハンザキの定期健康診断、“傷？”個体多数確認、伝染病か？
　　・スノコの下の 5 ｾﾝﾁの空間にスズメバチ営巣、見学者が刺される（写真 11）
１３日　“傷？”７個体隔離中のハンザキ１個体滅失
１５日　お盆の見学者が多数あり、対応は限界を超えた。
１６日　さらに隔離中のハンザキ１個体滅失
１８日　・福井県立大学の大学院生・前田知己さんボランティア～２２日（写真 10）
　　・ハンザキ死体２と生体１を病理検査のため日本獣医生命科学大学へ輸送
　　（文化庁記念物課と環境省野生生物課に緊急事態として許可を受ける）
１９日　毎日放送のハンザキ取材応対
２０日　・アンコ淵の巣穴開通
　　・オオサンショウウオ保護センターのポンプ･ピット排砂完了
２１日　・アンコ淵の巣穴にハンザキ出入り開始
　　・伊賀の特別天然記念物オオサンショウウオを守る会一行６名来所
２２日　・簾野の人工巣穴２か所にオス・メス各１個体あり
　　・ポンプ･ピットの取水口にフィルター・ユニット 1 ﾄﾝ型４基積む（防砂のため）
２３日　関西電力奥多々良木発電所の上部ダム湖（黒川ダム湖）からのハンザキ救出作戦
　　実施（～２５日）（写真３・４）
２４日　篠山鳳鳴高校生物部の顧問教諭など５名来所、ハンザキの研究方法について
２６日　カモガワハンザキ 10 個体搬入（125 ｾﾝﾁ 16 ｷﾛの大物も）、京大の吉川夏彦博士、フ
　　ランスのジャーナリスト、写真家同道、夜間調査で４個体チェック

２７日　円山川水系自然再生推進委員会の現地視察（写真５）
２８日　・親子水辺観察会８組 29 名、神戸市立須磨海浜水族園の坂田睦子講師
　　　　・アフリカ料理を食べて夜のハンザキを見よう！　約 50 名参加、ビストロ･ゼブラの奥見シェフと株式会社ウエスコの中島悟講師（写真１２）
　　　　・カモガワハンザキ、２個体咬まれて死亡（新入りの特大個体に？）
２９日　川遊び中の人から全長 15 ㌢のハンザキ幼生２個体収容、１個体は鰓孔内に鰓が退化、一方はふさふさしている。３？４？才判定しがたい
３１日　・水中小型カメラのデモンストレーション実施、アンコ淵の巣穴の観察を試みるも、光量不足で失敗
　　　　・アマゴの養殖池に侵入した全長 25 ㌢のハンザキ、傷まみれ（アマゴにやられた？）で保護、翌日死亡

・・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

ハンザキ研の無料公開も限界に来たようだ。年々の来訪者数が増加の一途たどってきていたが、この夏は完全にギブアップしてしまった。私の体調がよくなかったせいもあるが、次々にやってくる見学者は自分の都合で来るのであり、当方の時間なんて考えてくれないと言う点も大きい。昼食時間帯でもかまわずにやってくるので、昼飯抜きになることも多い。昼食時間がずれると更に多くの見学者の時間になってしまうからだ。今までは、ハンザキのことを知ってもらうことが保護につながり河川環境の保全にもなると言うことで、無制限に対応してきた。多くの方々に喜んでもらえたと思っているし、ハンザキ研の活動に賛同して、飛び込みの方がすぐその場で入会してくださった例も多い。ありがたいことで、なんとか現在の状態を続けて行きたいとは思うが体のほうが続きそうも無くなってきた。

さてどうしたらいいのだろうかと、事務局会議でスタッフに投げかけている。有料公開施設としては整備不足が気になる。トイレも校舎内のものは浄化槽が無いために使えない。やむなく仮設のレンタルトイレ４基でしのいでいる。水道も山水を塩素滅菌して使用しているので、大雨があると浄化槽が無いので泥水になってしまう。解説もほとんど付いていないので、案内なしでは理解が半減してしまうだろう。周回通路も満足とはいえない状態だし、危険な場所もあるのでフリーに見学してもらうには無理がある。

スタッフからどんな意見が出るのか分からないが、皆さんからも名案があれば提案していただきたい。非公開にするのか、予約制、公開時間の設定、公開日の設定、ボランティアのガイド募集、有料ガイド対応なども考えられるが混乱は免れない所だろう。体調不良の時は門を締め切ってシャッタウトしたこの夏休みであった。折角来られた方には申し訳ないことでした。

（本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。）